教員は語る

第八回

―藝大への期待・抱負・提言―

小松佳代子 × 廣江理枝

美術学部芸術学科（美術教育）准教授

音楽学部器楽科（オルガン）准教授

身体性と抽象的思考

司会　今回の教員は語る第八回は、美術学部芸術学科（美術教育）准教授の小松佳代子さんと音楽学部器楽科（オルガン）准教授の廣江理枝さんをお招きしました。藝大の教員になられた今、お二人は何をお感じになっていますか。

小松　私の所属は美術学部の美術教育研究室で、美術教育論と美術教育ゼミを担当しています。狭い意味での美術科教育ではなく、美術が人間形成にどのようにかかわっていくかということを原理的に考える授業を行っています。

研究室ではこのほかに課題研究という授業があり、修士の学生も博士の学生も、それぞれの研究テーマに関する論文発表が一年に一度課されます。美術教育研究室では作品の講評会が年に二度行われていますが、その論文版で指導の最後にコメントを出すことになっています。彼らは制作についてはかなりの技術を持っていますが、博士論文あるいは修士論文を書くときの技術は十分ではないので、そのサポートをするというのが私の仕事です。

美術教育は制作と論文の両方を提出しないと修士も博士も修了できません。あらゆる科から院生が集まる横断型の学科なので、絵画や彫刻、版画もいれば、陶芸、染織を制作する者もいます。作品もそうですが、論文についてもかなり厳しい基準で審査します。私のほかに二人の実技を専門とされている先生がいらして、それぞれ指導生をお持ちですが、お二人の指導生も含めて全員の論文を見ています。制作について私はわかりませんので、私の指導生の制作はほかの先生に見ていただくという協力体制をとっています。

東京藝術大学とのかかわりは、一九九四年に非常勤で一年間だけ教えたことがありましてそのとき以来となります。

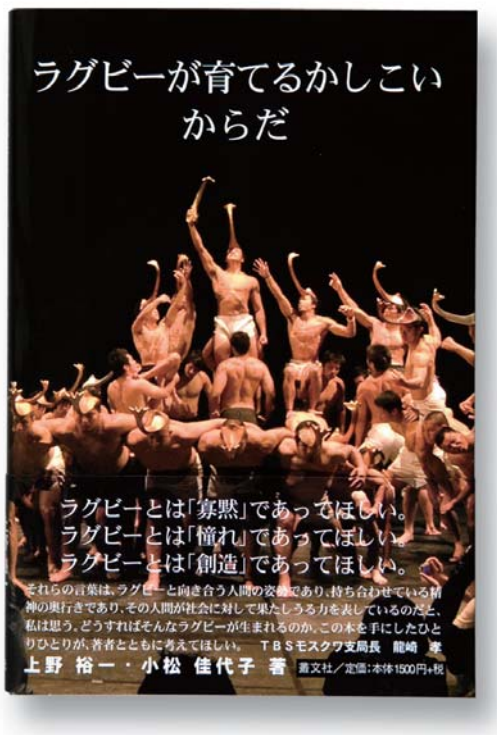
廣江　私は、器楽科（オルガン）の廣野（嗣雄）先生が退任され、その後任として採用されました。音楽学部では鍵盤楽器のなかにオルガンとピアノが区分されています。藝大では二〇〇六年度から非常勤講師として教えたのが初めてでした。現在、器楽科（オルガン）には学部生が十二人、院生が五人、古楽科のバロックオルガンも含めると計十九人の学生がいます。

藝大器楽科（オルガン）の入試は、オルガン実技を実施していますので、かなり高いレベルの演奏ができないと入ることができません。ただ音楽高校でオルガン科があるところはおそらくありませんし、もちろん藝大附属音楽高等学校にもオルガン科は存在しません。ピアノもヴァイオリンも同じだと思うのですが、受験する生徒はプライベートでオルガンの先生にレッスンを受けることになります。

私の場合、通っていたミッション系の中学校・高校にパイプオルガンに似た電子オルガンがありまして、それに非常に魅了されたのが最初の出会

いでした。中学生時代に少しかじったあと、大学ではピアノ科へ進みましたが、二年生のときに再びオルガンと再会し、大学卒業後は好きなことをやってもいいかなと思い、オルガンに取り組むことになりました。

小松　本日持ってきた本（『ラグビーが育てるかしこいからだ』）は、藝大に来てから出した本ですが、流通経済大学のスポーツ健康科学部にいたことがきっかけとなっています。教育学のなかで博士論文を書いた後に、私なりの教育学とは何だろうと考えたのです。現在、学力低下が叫ばれて、子どもたちに知識をつけさせるということばかりが着目されていますが、人間は身体的な面もあわせてすべてが教育の対象であるということを考えた場合に、身体論を含めた教育学の本を書きたいと思い至ったのです。



『ラグビーが育てるかしこいからだ』
（2007年・共著）

ただ私には身体にかかわる場がないので、日本ラグビー協会の競技力向上委員長を務める共著者（上野裕一氏）に現場のことを教えてもらい、どういうふうに言葉にしていくかを二人で考えながら形にしたものとなっています。

藝大で美術教育論を考えるとき、美術学部の学生がやっていることと、ラグビーというスポーツには共通する部分があると思いました。身体を使って制作していても、それを言葉にするのはすごく難しい作業で、学生たちとディスカッションしながら言葉に移しかえる作業をしているうちに、書いていることが見えてきたのです。

藝大生の特徴で一番大きいのは、恐ろしいくらいに抽象思考だということです。例えば「見るとは何か」とか、それこそ「美とは何か」とか、日々そういうことに向き合っているんですね。前の大学では教職課程にいたので、かなり実践的なトレーニングをする授業を行っていたのですが、藝大に来てみると、こんなに実学がもてはやされている世の中で、院生たちはつねに哲学的な問いに立ち向かっている。そんなに大きなことを考えていてそれが論文になるものか、こちらが不安になるのですが、彼らは具体的な制作があるのでいくらでも飛ぶことができる。そこが根拠になっているのですね。文献だけの人間は怖くてそんな言葉を使えないのですが、制作している実感のなかから抽象的な思考を導き出していくのですごく驚きました。

廣江　音楽のほうでもおそらく似たような傾向はあるかと思うのですが、私は小松先生のように言葉で学生と触れ合う機会がそれほど長くないと思います。レッスンの時間に学生が発している音を受け止めて、どういうふうに導いていくかという実践的な部分が大きいので、彼らが一体何を考えているのかというところまで踏み込んで読み込めないということはあります。ものすごく飛んでいることを考えているのかもしれないですし、ひょっとしたら指使いがどうしても、というところで止まっているのかもしれません。

オルガン音楽の歴史性と多様性

廣江　私は、オルガンは時代様式によってどのような違いがあるのか、構造はどうなっているのかなどを具体的に学んでいく授業も持っています。また様式研究といって、時代別、地域別の楽器・オルガン作品、そして当時の演奏習慣などについて学ぶ授業も行っています。

オルガンは二〇〇〇年から三〇〇〇年の歴史をもっています。レパートリーとして残っているの

小松佳代子（こまつ・かよこ）
准教授―美術教育
一九六五年兵庫県生まれ、一九九五年東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。一九九六年日本学術振興会特別研究員（PD）。一九九七年東京大学教育学部助手。二〇〇〇年流通経済大学経済学部専任講師。〇三年流通経済大学経済学部助教授。〇六年流通経済大学スポーツ健康科学部助教授。〇五年博士号取得（教育学。東京大学大学院教育学研究科）。二〇〇七年～東京藝術大学美術学部准教授。
著書に『社会統治と教育―ベンサムの教育思想―』（流通経済大学出版会・二〇〇六年・単著）、『ラグビーが育てるかしこいからだ』（叢文社・二〇〇七年・共著）ほかがある。

創立120周年記念企画 シンポジウム「芸術と教育2007 ―芸術教育の新たなる展開―」。東京藝術大学奏楽堂で催されたフィナーレ（2007年11月25日）

はせいぜい十一、十二世紀くらいからのものですが、それでもピアノやヴァイオリンのようなポピュラーな楽器よりはるかに長い歴史を持っています。ただピアノのレパートリーが主に公開演奏会というものが一般的になった時代以降のもので、現代の私たちにも入り込みやすいのに比べると、バロック以前の音楽は社会形態も違いますし、その背景を想像して学ぶしかないという要素があると思います。もう一つには、オルガンという楽器が教会の中で発展してきたということも大きな要素です。私たちが生活している日本の社会状況や環境とあまりにも異なっているわけです。

小松　オルガンコンサートは、廣江先生が出演された奏楽堂での演奏会（上野の森オルガンシリーズ8「ディートリヒ・ブクステフーデ没後三〇〇年記念 第二回」二〇〇七年十一月十七日）に伺ったのが初めてでした。とにかく荘厳な感じで、先生の弾いている姿がとても格好よかったですね。足がとてもよく動くので、ピアノの演奏会とは全く違う感じを受けたのと、オルガンが正面にあるのが珍しいというのも聞いていたのですが、音の通り道がまっすぐ客席に向かっていて音が全部一気に来る、ピアノやオーケストラとも違う、体全部で感じるような音が迫って来るというのを実感しました。

造形物としてもオルガンの形はとても素敵ですね。私が第一部の司会を務めて、廣江先生が第二部、第三部でオルガンを披露されたシンポジウム「芸術と教育二〇〇七～芸術教育の新たなる展開」（二〇〇七年十一月二十五日）のオープニングでは、水琴窟の音を流してオルガンに光を当てるという演出を学生と私たちが一緒に考えました。当日はオルガンの造形的な美しさに見惚れながら音楽を聴いていました。

廣江　オルガンという楽器は、奏楽堂にあるような大オルガンもありますし、鍵盤が一段しかない小さなオルガンも原理的に言えば全く同じ構造原理を持っていて、複雑であるか簡単であるかの違いだけなのです。多くの方はパイプオルガンというと、コンサートホールや教会にあるあの大きな楽器を想像されると思いますが、例えばアンサンブルをするときは小さなオルガンを使ったりもします。器楽科（オルガン）にはレッスンに使っているオルガンが二台、それから練習用に使うオルガンが二台あります。それらを駆使して授業を行うようになっています。オルガン音楽の魅力を一言で言うなら多様性ではないでしょうか。荘厳な感じがする響きの大きな音が出るかと思えば、すごくかわいらしい音が出たり、さまざまな表情を持つ楽器なのです。いろいろな可能性を持つ、それこそオーケストラみたいな楽器であるということは大きな魅力の一つだと思います。

J・S・バッハはオルガン音楽にとって重要な作曲家ですが、例えば宗教的な背景があって入り込みにくいという方には、ロマン派のものやシンフォニックなオルガン音楽を聴いていただくとコンタクトが取りやすいのではないでしょうか。フランツ・リストにもかなり重要なオルガンのレパートリーがありますが、もう少し時代が下ったフランスのセザール・フランク以降の交響的な響きのものは、シンフォニーがお好きな方には取っかかりをつくりやすいかもしれませんね。

二〇〇八年は生誕一〇〇年になるオリヴィエ・メシアンの全曲演奏会を奏楽堂で行います。演奏芸術センター企画による奏楽堂でのオルガン演奏会はその時だけなのですが、学生の修了演奏、修士リサイタル、卒業試験演奏も奏楽堂で、全て公開で行っております。オルガン音楽を聴きたいという方はぜひ一度足を運んでいただけたらと思います。

現場の現実とこれからの課題

廣江　私が学生だった時期に比べると学生が置かれている環境は一〇〇倍くらいよくなっていると思います。私が藝大に通っていたころは、レッスンや練習に使用できるオルガンは二台しかありませんでしたから。もちろん奏楽堂の大オルガンもなかった時代です。私が留学している間にレッスンで使用しているもう一台のオルガンが設置されたのですが、そういうことを考えると、廣野先生が整備していかれたものは本当に得がたい財産なんです。

私たちは今それをどのように活用できるか、それを使ってどんなすばらしい人材を送り出せるかということが求められていると思います。それを具体的にどのようにすれば実現できるかを考える

のが、これからのいちばん大きな課題ですね。

器楽科（オルガン）以外の科との交流はまだまだなのですが、古楽科の鈴木雅明先生は器楽科（オルガン）の先生でもあるので、オルガン専攻の学生を教えるといったレベルでの交流はあります。古楽科とは共有しているレパートリーの時代も非常に多いんです。また、器楽科（オルガン）の学生が、副科でチェンバロを習ったり、アンサンブルでほかの楽器の学生と交流をもったりということもあります。しかし、美術学部との交流は、学生レベルでは藝術祭の神輿作り、教員レベルでは先日のシンポジウムのような機会以外では、ほとんどないというのが現実ですね。

私自身、絵や彫刻を見ることは好きですが、時々よくわからないことがあるんです。できればたくさん足を運びたいと思いつつ、忙しさにかまけて国立西洋美術館も素通りするだけで時間が過ぎていってしまいます。

オルガンは教会の中にあったので、多くの絵画に囲まれてつくられた音楽であるということを考えると、美術館に足を運び、オルガンを取り巻く環境を知るということの意味はあるのではないかと思っています。

小松　私は、今日ここに来る前に学生のアトリエに一時間ほどお邪魔して、モデルを前にして制作しているところを初めて見たんです。彼は「触覚の教育学」というタイトルの博士論文を書く予定なんですが、その触覚というのは目で見るのではなくて手で見るものだと言うんです。そのことの意味を概念としては理解できるのですが、実感としてわからなかったので制作現場を見せてもらいました。たった一時間見ただけで何かが理解できる訳ではないのですが、彼らが考えようとしている足場みたいなものを理解するには、論文の字面だけを見ていればいい、というわけではないと思うのです。私の場合、直接制作にかかわることはできないので、少なくとも現場を見るようにしないといけないと強く感じていて、それが私の大きな課題です。

美術史に関して言いますと、教育史という授業のなかで例えば「子どもの歴史」あるいは「子どもの図像学」という、どのように子どもが描かれてきたか、中世と近代で子どもを見る視線がどのように変化したかという勉強はしましたが、あくまでも教育史の関連で読んだだけなのです。大学美術館や陳列館の展示はなるべく観るようにしていますし、学生たちの展覧会も少なくないので、できるかぎり出かけて行って、見る目を養わないといけないと思っています。学生からも「先生たくさん見てください」と言われるのですが、私はまだ作品を見て刺激を受けるというところまでいっていなくて、圧倒的な他者性をすごく感じて疲れてしまうのが現状です。しかし、これから何年も藝大にいることと思いますので、その間に、美術にかかわることと今まで取り組んできたことをつなげて何かを書きたいと思っています。安易にスポーツと美術が似ているとかということではなく、もっと根源的な人間形成にかかわるようなことです。体育もそうですし、美術もそうですが、そういうものが実は人間形成にとって本当に深いところで意味がある、ということについて書くことが大きな目標です。

廣江理枝（ひろえ・りえ）
准教授―器楽科（オルガン）
東京生まれ。一九八八年桐朋学園大学音楽学部ピアノ科卒業。東京藝術大学別科器楽専修（オルガン）を経て、一九九〇年同大学院修士課程器楽専攻オルガン研究分野入学。東京藝術大学院在学中に二年間ドイツ国立ハノーファー音楽大学に学び一九九四年同大学卒業。一九九五年東京藝術大大学院修士課程を修了。九八年シュトゥットガルト国立音楽大学オルガン科ソリスト課程卒業。二〇〇六年東京藝術大学音楽学部非常勤講師。二〇七年～東京藝術大学音楽学部准教授、オルガン主任。
一九九四年オーゼンセ及び一九九六年武蔵野市の両国際オルガンコンクールにてそれぞれ最高賞（一位なし二位）受賞。九八年シャルトル大聖堂国際オルガンコンクールでグランプリならびに聴衆賞を受賞。二〇〇六年までドイツを拠点に、ヨーロッパ各国、アメリカ合衆国、日本などで演奏活動を行う。ソロ演奏会のほか、トランペットやヴァイオリン、舞踏などとの協演も多い。

器楽科（オルガン）での講義風景